

平成27年度 第14回講演会 記録

日 時	平成27年11月14日(土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿 大ホール
講 師	海の生き物を守る会代表、北海道大学名誉教授 向井 宏 先生
演 題	砂浜の保全と森里海連環
備 考	参加者数 143名、 記録 中山 勝一

向井先生は東京大学、北海道大学で温帯、熱帯のアマモ場生物群集の研究を続け、近年はジュゴンの生態研究にも取り組んできた。藻場の研究から海の環境と陸上の生態環境の結びつきを指摘し、京都大学で森里海連環学の研究教育に取り組むと共に、「海の生き物を守る会 AMCo」代表を務める。今日テーマでは砂浜の保全から森里海連環を考察する。

「講義概要『砂浜の保全と森里海連環』

森里海連環は漁業者の実感として分かっていたが、科学的根拠がなかった。21世紀に入り学問の総合化の動きの中で森里海連環が認知されてきている。

海岸は岩盤の風化によって作られた砂・泥・礫が交互に織りなす砂浜・岩礁により形成される。そこに生物が棲み込みサンゴ礁、アマモ場、ガラモ場、

水中林など沿岸生態系が作られ、形成過程において河川の役割は大きい。現在日本の砂浜や干潟の減少は甚だしい。日本全体砂浜は毎年3m程度後退しており、コンクリートブロックや護岸など人工海岸は日本の海岸の過半に及ぶ。岩礁地帯を除くと、砂浜の自然海岸はわずか10%程度しか残っていない。砂浜浸食の原因は陸上の生態系と沿岸の生態系の相互作用を無視した国土改変によるところが大きい。森と海の繋がりは河川を通した物質と土砂の移動により結び付けられる。砂の移動も非常に重要な森里海連環の一面である。陸と海の流砂系の分断が砂浜、砂堆、干潟消滅の原因であり、ダム、砂防ダム、河川砂の採取、港湾・防波堤の建設、海砂の採取により砂が止められる。東日本大震災後の復興政策で巨大防潮堤の建設が進められている。生物学的に陸の生態系と海の生態系の接点(エコトーン)、生物多様性を押しつぶし、海岸線を死滅させる結果をもたらす。それが防災の名目で日本全体に拡散しつつある。北海道で環境アセスメントの委員を務めているが、諫早湾干拓事業の例を引き合いに出すまでもなく縦割り行政、自然を考えない公共投資の行き着く先に危機感を覚える。

「所感」

治山治水、砂防を目的とした国土保全政策が結果的に森里海の連環を断ち砂浜、干潟の消滅と生物多様性の減少を招いている。田中先生も言われるように

「うめき声」が聞こえてきた講義であった。縦割りの弊害を克服したイギリスの海岸管理は参考になるのかもしれない。また向井先生の「海の生き物を守る会」が提唱する生物多様性のための BIOSHIELD も答えの一つであろう。海岸林、湿地、砂丘などのモザイクが海岸生態系を構成しこれらによる多重防御が防災と共に生物防御でもあるという考え方である。

「未来に残しておきたい日本の砂浜30選」を砂浜保全の出発点に、若い世代に何を残すか真剣に考える時であり、自然との共生を目指す社会の構築が急がれる。



砂浜の消滅について語る
向井先生



日本に残る自然海岸



<http://e-amco.com/>